広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	日本人学部生の大学生活における意識変容の語り ： 質的調査の観点から
Auther(s)	恒松，直美
Citation	総合学術学会誌 , 13 : 19 - 26
Issue Date	2014
DOI	
Self DOI	
URL	http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00040629
Right	Copyright (c) 日本総合学術学会
Relation	

日本人学部生の大学生活における意識変容の語り：
質的調査の観点から

Narrative of Japanese Undergraduate Students about their Consciousness Transformation through University Life :
From the Perspective of Qualitative Research

恒松直美（広島大学）

Naomi Tsunematsu (International Center, Hiroshima University)

総合学術学会誌　第 13 号　日本総合学術学会　2014 年
Journal of Society for Interdisciplinary Science, Vol.13
Japan Society for Interdisciplinary Science, 2014

〔原著論文〕

日本人学部生の大学生活における意識変容の語り：質的調査の観点から

Narrative of Japanese Undergraduate Students about their Consciousness Transformation through University Life : From the Perspective of Qualitative Research

恒松直美（広島大学）
Naomi Tsunematsu (International Center, Hiroshima University)

Abstract:
This article examines how consciousness of Japanese undergraduate students has been influenced and transformed through university education. University period is a transition time for students to prepare themselves to go out to the real world, and students tend to sensitively react to their experiences in their everyday lives. They are searching for the way to apply their academic learning to practical knowledge in the society, and are searching for their life path, meaning of their life, and what difference they can make to the world. How students spend their university days significantly affects their worldview and how they relate themselves to the world. By using data based upon the semi-structured interview with each student, I will examine the factors which have influenced the consciousness of undergraduate students from academic, social, and personal perspectives. I have attempted to reveal 'students' voices' about their university lives, by using the qualitative research method.

Keywords: undergraduate students, Japanese university, transformation, narrative, qualitative research

1. はじめに－本研究の目的

本稿では，地域社会にある広島大学に在籍している日本人学部生に焦点をあて，日本の大学教育による学生の意識変容について考察する。大学教育経験者の大学教育とキャリアにおける意識変容の研究[1)]の一環として，日本の大学教育と大学生活による多様な体験がどのように学部生の意識変容に影響し，学生の世界観や社会観を形成し，将来のキャリアへの展望や日本社会及び世界との関わりに影響を与えているのかについて分析する。日々変化するグローバル社会において，大学は国際競争力にさらされ，国際スタンダードでの大学教育の質保証やアカウンタビリティの課題への取り組みが問われる中，本研究は，地域にある広島大学の学部生が，大学生活にどのように影響され意識を変容させているのかを学生の語りをもとに論じる。大学のコミュニティや人間関係，課外活動や異文化体験も含め，大学教育に関する学生の語りを多角的に分析し，大学が学生の人生に与え得る影響を探るとともに，大学が学生に提供し得る教育機会の発展と支援体制の構築の可能性について探る糧とする。

2. 本研究の理論的背景

本研究では，日本の地域の大学において日本人学部生が体験する意識変容に焦点をあてる。大学の授業や教職員と学生間の関わりからの影響. 留学生との交流や留学体験がもたらす影響，課外活動や社会体験による影響など，学生の意識に影響を与える要因について幅広く多角的な視野から捉える。学生自身の体験をもとに，学生の意識が構築する世界を学生の言葉で表現することにより，学生から見た大学教育の意義を探る。現在，大学国際化やグローバル人材育成について盛んに議論される中，学生はその現実的意味が把握できず戸惑っている。例えば，筆者の授業を受講している学生[2)]の「グローバル30」[3)]の認知度は低く，大学改革や大学国際化の理論的

発展と広島大学の学生の意識の間には大きなギャップが存在する。学内での国際交流会などは存在するが留学生と日本人学生との共同カリキュラムは現時点ではなく，表面的交流に終始する傾向にあり，筆者の大学改革の動向に関する言及に驚く学生は多い。

これまでの大学教育と日本の大学生の意識変容についての研究では，高等教育に対する学生と教員の意識変化についての調査（瀧上, 1998）や，異文化体験による学部生と大学院生の日本人的心性の変容の研究（鶴田・小川, 1985），異文化接触のある協同的活動がもたらす留学生と日本人学生の相互の意識変容の研究（神谷・中川, 2007），日本語学習支援活動による学部生と大学院生の意識変容の研究（水野・ハリソン・高梨, 2012），教育改善活動に参加する学部生と大学院生の意識変化についての調査（安田・近田, 2009）等がある。また，キャリア教育プログラム，インターンシップ，ボランティア活動などに関する先行研究のレビューに基づき，大学院生の課外活動による意識と行動の変容とその尺度の在り方について調査した研究（日潟・谷・上長・則定・石本・齊藤・城, 2008）がある。課外活動の事前と事後の自己内での位置づけが意識変容に影響を与えることが示唆され，自己内意識，社会的意識，活動の位置づけの3側面から捉える尺度の開発の有効性を提示しており，課外活動がもたらす大学院生の変容を深く掘り下げて分析している。しかし，大学生活を全般的に捉え，大学による学生への影響の全体像を把握できるような大学生の意識変容についての質的調査はあまり発展していない。その状況を踏まえ，本研究では，大学生が大学生活全体を振り返り意識変容をもたらした体験について自分の言葉で自分の解釈を語るナラティブを重要視した。

筆者による高等教育による意識変容の研究の一環としての交換留学生の意識変容の研究（恒松 2012）では，日本の大学への 1 年間の交換留学が，自身のアイデンティティの問い直し，人生観と世界観や将来のキャリア展望の変容，留学の意義づけなど，交換留学生の人生に多面的に重要な影響を与えていることが明らかとなった。日本人学生についても，大学教育が 学生の意識や人生観に多面的に影響を与えていることが考えられる。

Dalton （2001）は，大学時代は，多様な事象に対し疑問を持ち，人生の目的を見つけ，自分自身のアイデンティティを確立する時期であると論じる。自身の精神性（spirituality）を探求し社会に出る準備をする過程で敏感に反応し，可能性と弱さの共存する時期が大学時代である。意識変容の研究を行った Mezirow（1994）によれば，習慣的に準拠している前提や価値，信念を構成する枠組みである「意味づけをする観点」によって，経験の意味づけや解釈がなされる。Mezirow（前掲）は，意識変容の研究で，生き方やアイデンティティについて根本的な問い直しをせまるジレンマとの遭遇，異文化との接触による新しい価値感や思想との出会い，啓発的な議論や作品との接触による価値感の揺さぶりにより，人はそれまでの自明性や安定性を疑問視するようになると論じる。大学時代は，成人へと変容する過程で，その後の人生の選択に影響する経験の意味づけを行い，様々な出会いにより価値観を形成する時期とも言える。多様な文脈を持つ時間的及び空間的な変化プロセスの中で大学や社会で出会う人々から影響を受け，学生は，出来事を解釈し，再解釈し，再構成し，意味づけし，意識を変容させていくのである。

3. 調査概要

3.1 調査対象者とその背景

本調査における分析の対象を広島大学に在籍している学部生とし，大学内での様々な機会で接した幅広い範囲の学生にインタビューすることを目標とした。筆者が顧問を務めるクラブに所属する学生，筆者の担当する交換留学生向けの授業で全学公開のセミナーに参加した学生,偶然学内で話すきっかけのあった学部生とその周辺の学生，筆者の研究の支援員をした学生のサークルの仲間，などなるべく一部の嗜好性を持つ学生に偏らず幅広い対象者にインタビューを行えるよう配慮した。インタビューは, 2009 年 4 月から 2013 年 2 月までの間に行い，1 年生から 4 年生までの男子学生 17 名，女子学生 14 名の合計 31 名に対し行った。学生の学部は法学部，文学部，教育学部，経済学部，総合科学部，生物生産学部，理学部，工学部，医学部と広範囲に渡り，学年は，1 年生 4 人，2 年生 4 人，3 年生 9 人，4 年生 14 人である。その概要を表 0 に示した。

3.2 調査方法

1～4 時間に渡るインタビューを一人ずつ教員の

オフィスで行った。インタビューの開始前に，話したくないことは一切話す必要がないこと，秘密を厳守し，本人と確認できる形で論文等に記載することはないことなど，プライバシーには十分配慮することを説明した。インタビューでは，学生の自発的発言を尊重し，学生が自由に思いを述べられるよう配慮した。学生の心の声と意味づけを引き出す方法として学生のナラティブを重要視し，ライフヒストリーに近い形で学生の体験を引き出す形となった。インタビューの解釈と分析は，研究者の価値観や人生観が影響し，対象者との相互作用による体験の意味づけであることも認識している。鈴木(2009)は，外傷アスリートのリハビリテーション過程におけるソーシャルサポートの影響に関する研究で，やまだ(2000)の論じる，人々が日々の行動を選択し，編集し，構成し，意味づけをする現実，研究者と対象との関係性に基づき聞き手と語り手の相互作用により対象者の体験の多様な意味が語られ引き出される「物語る」行為に着目し，アスリートの心の声を引き出す研究方法としてライフストーリー法を用いている。本研究でも同様に，研究者と対象者の関係性と相互作用により，学生は自らの人生における様々な体験を語り，意味づけをし，調査結果が引き出されたと認識している。

表0.　インタビュー回答者の性別・学部別人数

学部		1年	2年	3年	4年	女性合計	男性合計
法学部	女性		1	1		2	
	男性						0
文学部	女性	2			1	3	
	男性			3			3
教育学部	女性		1	2	3	6	
	男性			1	3		4
経済学部	女性	1				1	
	男性		1		1		2
総合科学部	女性			1		1	
	男性	1			1		2
生物生産	女性				1	1	
	男性						0
理学部	女性					0	
	男性			1	2		3
工学部	女性					0	
	男性		1				1
医学部	女性					0	
	男性				2		2
合計		4	4	9	14	14	17

3.3 調査内容

大学教育による日本人学部生の意識変容を総括的に探る方策で進めた。大学の授業，教職員との関わり，課外活動や国際交流，社会体験，個人的生活など，学問的・社会的・文化的・個人的側面を含む大学生活全般の学生への影響を総括的に分析するにあたり，まず質問項目を設定し,パイロット・スタディとして教育学部の学部生男女5名にインタビューを約1時間行った。回答者が多面的に意識変容の体験を語るインタビューとなっていることを確認した。

インタビューの質問内容は下記の5つの分野に分類できる。**1. 勉学と関連した大学生活に関する質問**（授業，大学教員との接触，大学への期待と現実，大学に望むこと），**2.学内における交流に関する質問**（クラブ活動，国際交流等），**3. 社会体験に関する質問**（ボランティア活動，社会人との接触，アルバイト等），**4. 将来に関する質問**（将来したいこと，希望する職業，大学での勉強と将来との関係），**5. 自分の人生に関わる質問**（生きる意味，自分の深い部分に触れた人，直観の声など）の5つの分野である。学生が話す内容の範囲に制限を設けないことで，学生が思いを実直に話し易くなり，人生全体における大学の持つ意味も捉え易くなると考え，学生が自由に体験を話せるよう配慮した。

質問方法は，例えば，「1.　勉学と関連した大学生活に関する質問」であれば,「授業や大学教員との関わりにおいて何か感じたこと，影響された体験はありますか」,「大学への期待と実際の体験はどうですか」,「大学に望むことがありますか」というように，学生が意識変容の体験を語りやすくなるよう具体的に質問していった。各2~5についても同様に行った。

4. 分析と結果

4.1 分析方法

インタビューで学生が述べた言葉をそのまますべて記述し，MaxQDA ソフトを使用して記録した。男子学部生と女子学部生について別々に「インタビュー・データ」の整理とコーディング及びカテゴリー化を行った。各学生のインタビューの記述内容から意識変容に関する部分を「インタビュー・データ」として提示し，その「要約」と抽出した「変容に関するコード」を表1（男子学生）と表2（女子学生）に示した。表2はスペースの関係上一部のみ掲載した。その後，類似したコードをカテゴリーに分類し

た。表 3 に男子学生の意識変容に関する 15 個のコードと 8 のカテゴリーを提示し，表 4 に女子学生に関する 28 個のコードと 12 のカテゴリーを提示した。

本研究は，重層的で多面的に絡み合う文脈から意識変容の概念を抽出し，社会的文脈において解釈した定性的調査である。分析では学生自身が語った言葉を重要視した。人生における出来事は多くの要素が多角的に関連性を持ち複雑に絡み合い，大学教育からの影響もそれ以前の人生の体験と連動しており，その解釈と記憶は絶えず再解釈され変容していく。客観的真実の存在を批判し，各自が外界との相互作用により自分の現実を構築しているとの構築主義の立場からも人の記憶の曖昧さが指摘できる。千田（2001，4 頁）は，構築主義の指標として，社会を知識の観点から検討する志向性，その知識は人々の相互作用によってたえず構築され続けていることの自覚，知識は広義の社会制度と連携していることの認識，を挙げる。カテゴリー化された概念も相互に関連し重層的な意味を持ち，人が解釈するフレームや見解も時間と社会・個人の変化とともに変容するため，カテゴリーの分類や「客観的事実」の提示には限界がある。意識変容をもたらした要因として抽出したコードとカテゴリーは，前述したように相互に関連し合っている。経験の持つ意味は，分類されたカテゴリーのみではなく，複数のカテゴリーと関わりを持つことも少なくないことを認識した上で考察を行った。

4.2 分析結果

男子学生の意識変容に関しては,「先生と学生の関係がウェットな場（親交を深める場）の要望」「大学で勉強する意味の模索」「専門以外の知識習得の要望」「分析をする過程で研究に興味」「研究における英語の必要性の認識」「アメリカ留学体験の厳しさへの見解」「留学生との学びの場を探す重要性」「他の学生の甘さに関する見解」「大学間のつながりを希望」「学内でのつながりを希望」「就活における部活の重要性の認識」「外国や社会を知る重要性の気づき」「学問と社会をつなげる要望」「社会人との接触を希望」「ベンチャー企業体験による経営者の視点」の 15 のコードが抽出された。それを「大学教育への要望」「研究への興味」「留学の厳しさ」「留学生との共同学習」「学生の甘さ」「大学間・大学内でのつながり」「大学外の社会を知る要望」「学生と異なる視点」の 8 のカテゴリーに分類した。女子学生については, 28 のコードが抽出され,それを「大学教育への要望」「高い英語能力の必要性」「授業における積極的な態度」「留学準備の早期の開始」「留学による自己の変容」「学内での多様な交流の希望」「大学時代の価値」「仕事に関する知識」「大学外の社会を知る要望」「世界を知る重要性」「人生がもたらす意味」「柔軟な思考」の 12 のカテゴリーに分類した。

男子学生 17 名, 女子学生 14 名の合計 31 名の少数の深い質的調査であることと，インタビューと抽出されたカテゴリーを考察した際,特にジェンダー概念等に影響された顕著な意識変容に該当するケースがないことを鑑み,本研究では抽出されたカテゴリーに関し男子学生と女子学生の意識変容の特性を論じることは控えることとした。男子学生と女子学生の双方から抽出されたカテゴリーについて統合しカテゴリー・グループを生成した。男子学生からは 8 のカテゴリー，女子学生からは12のカテゴリーが抽出されたが,「大学教育への要望」・「大学外の社会を知る要望」のカテゴリーは男子・女子学生の両方から抽出されたため，合計で18のカテゴリーが抽出されたことになる。これらのカテゴリー間の関連性を考察した結果,「大学の授業に対する考え」「留学による異なる世界の体験」「幅広いつながりの構築」「大学外の社会に関する知識」「世界に関する知識」「大学生活の意義」「人生と考え方」の 7 つのカテゴリー・グループを生成した（表 5)。以下に各カテゴリーの分析を行う。

1) 大学の授業に対する考え

自分の専門の詳細を早く知りたいとの思いを持つ学生，就職活動を経て改めて教養教育で幅広い知識を持ちたいと要望する学生など，大学教育に関する見解の変容は多様である。学内で開催された国際セミナーに参加し他国の学生と議論した学生や研究により海外の研究者の英語論文を読むことに挑戦した学生は，高い英語力が世界では必要とされる現実を認識している。留学を現実的に考える段階で早い時期からの留学準備の重要性を認識した学生がいた。

2) 留学による異なる世界の体験

夢を描いてアメリカに留学したが, あまりの厳しさに中退して帰国し安易な留学と海外で活躍するこ

表1.　インタビューのデータとコード名（G1：男子学部生）

学生No.	ID.	学年	インタビュー・データ	項目No.	要約	変容に関するコード
1	01 教育学部	3年	(交換留学生向けインターンシップ授業の)PBL(課題発見解決型学習)もっと早くから体験したかった。自分からアンテナはらないとひらかない。情報あっても、アンテナはってないから見ない。	1	自分のアンテナをはっていない態度への見解	留学生との学びの場を探す重要性
			すごく厳しい。周りの日本人の学生、ぬるい。高校まではしごかれる感じない。大学で野球しかやってなかった。厳しい世界。見方が変わった。なめてるな、というやつに腹が立つ。自分にも気づけなかった。厳しいところに入ると、一般の学生、なめてるな。	2	体育会のクラブ活動における厳しい体験	他の学生の甘さに関する見解
2	02 経済学部	4年	研究者なので教育に興味ない。教育とかは人との学問でウェット。経済は数字でウェットでない。性格的に理系。理系ではウェットでない。人に興味ない。総合科学、文化人類学とかは人。大学教育で失望した。ゼミでもっと厳しくやれるのかと思った。研究室ない。あこがれていた。しんどいけどみんなでがんばろう。	3	大学教育と教員への失望	先生と学生の関係がウェットな場の要望
			就活、品物。見られる。部活やっておけばよかったと思った。体育会系のうまくいっている様を見た時。やっておけばよかった。就活の時。目に見えない世の中の見方。新聞に書かれていることは本当でない。女性増やすべきとか、英語すべき、とか。	4	就職活動・世の中の表に出ない評価方法	就活による部活をする重要性の認識
			大学外の人と接触すればよかった。留学すればよかった。自分のために。外国人の友人とか。	5	社会人との接触と留学を希望	外国や社会を知る重要性の気づき
3	04 理学部	4年	働くことになにが必要か、という話か？考えれば考えるほど分からない。考えない方が勉強できた。なぜ働く必要があるのか。なぜ、仕事をする必要があるのか。やっぱり勉強して就職する、無難な道。価値観はもとのまま。持つわけではないが、お金が必要。しかし、なぜ働く、稼ぐ。その組み合わせ。自分を否定する人、考え始めて分からなくなる人多い。	6	働いたり仕事をする意味への疑問	大学で勉強する意味の模索
4	08 工学部	4年	米国、勉強と生活大変。言葉通じない。18年どっぷり日本で過ごしていたんで、改めてどまどった。アメリカで。もともと積極的でない。積極的でないとやっていけない、授業、友人関係。いいたいこと。恋愛関係も。成績も厳しい、W大学の航空力学への編入を目標、Sコミュニティ・カレッジをあと半年残して帰った。(広島大学の)休学は1年半。アメリカの残るか、帰るか。広大へ帰ることを選んだ。この先、アメリカでやっていく自信がなかった。アメリカでこれ以上する自信がなかった。難しいと思い、さんざん考えたので、後悔はしていない。しばらく留学しようとは思わない。	7	アメリカ留学体験の厳しさ	アメリカ留学体験の厳しさへの見解
			教養、すごく興味があっても取りにくい、取らないといけない単位が多すぎて、他のことをする余裕がない。経済学、経営、英語、とか余裕を持って取りたかった。取ろうと思って取りに行くと基本的なことしか習えない。もう一歩行こうと思うと時間割的にきつい。専門よりも、もっといろいろ取りたかった。下地がないとだめなのわかる、工学部で。しかし、使わないものもある。理系の工学部の物理、数学が一番好きだが、そればかりだとつらい。別の勉強することで、新しい発想が生まれることはある。もうちょっと別の勉強ができればいい、と思う。	8	学際的学びと教養教育への興味	専門以外の知識習得の要望
5	011 理学部	3年	会社をして変わった事、下から見た、上から見る。階段状にものごとを見る。逆の発想をするようになった。	9	起業の体験	ベンチャー企業体験による経営者の視点
6	014 文学部	3年	ほかの大学と交流がない、のはびっくり。大阪の大学にいって見たりとか。高校だと単位が県で(他県に)知られてないと思うが、大学では出身地もいろいろ、広大なら向こうに行っても知られている。	10	他大学とのつながりのなさ	大学間のつながりを希望
			形としてなくてもいい、サークルだけでもいい。サークルのつながりも狭い。ロックもない。もっと広いつながりが欲しい。閉所恐怖症。	11	学内でのつながりのなさ	学内でのつながりを希望
7	015 総合科学部	4年	学問、人のために、生活、につながっていない。それを言うと、学問はそういうもんじゃない、という。数学が、現実から数学へ。意義が伝えられる先生になりたい。点数より得たものから大事なものを切り取って、論理的に切り取って社会に伝える。今、自由が許されている、自分で、相手にも伝えられて。	12	学問と生活・社会とのつながり	学問と社会とをつなげる要望
8	016 教育学部	4年	議論したりとかの授業にもでた。あまり強くいえない性格。そういうのがきらいなわけではない。おもしろくない、と思わせた一番の原因。ゼミを経験した、自分の考えがあり文章化する、この点はおかしい、よく分からない、とやっていくうちに。学会誌に論文載せている人、こういうのがすごいものなんだろうな、と思った。	13	研究のおもしろさを知る過程	分析をする過程で研究に興味
			大学院いきたい。英語いるな、と思った。研究分野に関連した文献を訳してみようかな。	14	大学院にいくため英語の研究論文を勉強	研究における英語の必要性の認識
9	017 総合科学部	1年	研究好き。学びたい。将来何がしたいか、わからない。それで、やっていけるかどうかかわからない。実際に、就職、大学院とか、その人を呼んで聴く。周りみんな知っているか疑問。学部ごとにどんな人生歩んでいるか知りたい。一つ上の人にきいてもしょうがない。	15	将来を模索するため多様な社会人の話を希望	社会人との接触を希望

表 2.　インタビューのデータとコード名　(G2：女子学部生　一部のみ掲載)

学生No.	ID.	学年	インタビュー・データ	項目No.	要約	変容に関するコード
1	01 経済学部	1年	入学してすぐに、すごい先輩にあった。Sさんに会った。経済。入学前に生協のオリエンテーション。入学生対象。適当に振り分けて交流する。学部ごとにも集まる。学部の先輩。Sさん。出会い。かなり大きい。Sさんにあい、先輩方とであって、教えてもらった。広大だけのコミュニティでは狭い。もっといろんなことに挑戦しないと、これから先のこと。C団体。広大生に向けた情報発信。会っていなかったら、人の出会いがまず少なかった。通じてそこからのいろんな先輩、他学部とか。学年。出会った方達の出会い大きい。考え方、価値観、海外経験。起業していた先輩。Iさん。以前会ったことあった。勉強になることが多かった。それは、普段友人といるだけでは学べないことだな、と想った。	1	学部の先輩達との出会いにより広がった世界	大学外や幅広い人と出会う重要性の認識

＊表 1・表 2 では、匿名性を守るため、インタビューで学生が述べた大学名はイニシャルとした。また、インタビューの一部のみ抜粋しているため文脈が理解しにくい箇所については（　）に追加の説明を加えた。匿名性を保つために言い換えたか所は[　]で示した。

表 3.　カテゴリーの生成 (G1：男子学部生)

変容に関するコード	No.	カテゴリー
先生と学生の関係がウェットな場の要望	3	大学教育への要望
大学で勉強する意味の模索	6	
専門以外の知識習得の要望	8	
分析をする過程で研究に興味	13	研究への興味
研究における英語の必要性の認識	14	
アメリカ留学体験の厳しさへの見解	7	留学の厳しさ
留学生との学びの場を探す重要性	1	留学生との共同学習
他の学生の甘さに関する見解	2	学生の甘さ
大学間のつながりを希望	10	大学間・大学内でのつながり
学内でのつながりを希望	11	
部活をする重要性の就活による認識	4	大学外の社会を知る要望
外国や社会を知る重要性の気づき	5	
学問と社会とをつなげる要望	12	
社会人との接触を希望	15	
ベンチャー企業体験による経営者の視点	9	学生と異なる視点

とに対する考えを変容させた学生がいた。留学により授業での他学生の積極的な態度に刺激を受け再留学への強い要望を持つケースがあった。また留学中に新しい自己の発見をし，自分に対する考えが変容しポジティブになった学生がいた。

3)　幅広いつながりの構築

学内での人とのつながりのなさを感じ，もっと幅広い学内でのつながりを要望するようになった学生，総合大学の強みを生かし教員・学部生・大学院生の幅広いつながりを希望する学生がいた。また留学生や他大学の学生との交流も要望するケースがあった。

4)　大学外の社会に関する知識

就職活動をして初めて新聞などには記載されていない社会の現実を知るようになったと強調した学生がいた。大学生活を終える直前になり，留学したり大学外の人と接したりするなど幅広い体験をすべきであったと感じる学生，将来何がしたいか分からず，学部ごとに就職した人や大学院生から具体的な事例を聞く要望があった。学問の有益性が議論される中，学問の意義を社会に論理的に伝えられる人になりたいと希望する学生がいた。また，社会人や他学部生

表 4.　カテゴリーの生成 (G2：女子学部生)

変容に関するコード	No.	カテゴリー
専門について早く知る要望	7	大学教育への要望
教養教育の大切さの認識	16	
英語はツールであるとの認識	4	高い英語能力の必要性
よりレベルの高い英語教育への要望	6	
留学先での授業での積極的な態度	5	授業における積極的な態度
留学準備を早く開始する要望	15	留学準備の早期の開始
留学準備を早く開始する重要性の認識	27	
留学による自己開示	12	留学による自己の変容
留学によるコンプレックスの変容	18	
教員・学部生・大学院生との交流を希望	24	学内での多様な交流の希望
「就活」より何をするか	3	大学時代の価値
大学生の時期を活用する重要性	8	
社会人との接触による自由な学生時代の価値の認識	23	
仕事で人に感銘を与える意味	2	仕事に関する知識
社会にある仕事について知る要望	9	
アルバイト体験による希望職種の発見	21	
現場での職業体験による見解の変容	22	
大学外や幅広い人と出会う重要性の認識	1	大学外の社会を知る要望
大学外の社会を知る重要性	28	
意識を変え広い世界を知る必要	25	
多様な国際貢献の認識	10	世界を知る重要性
世界情勢についての知見を持つ要望	11	
国際的体験を早く体験する重要性の認識	13	
日本外の世界に目を向ける重要性の認識	14	
留学生の存在についての意識変化	26	
自分が今そこにいる意味	17	人生がもたらす意味
偶然がもたらす出来事の意義	19	
柔軟な思考を持つ重要性	20	柔軟な思考

との幅広いネットワークを持つ刺激的な先輩との出会いにより大学の枠を超えて学ぼうとする学生，飲食店のアルバイトで社会人の顧客との会話により大学内だけでは知識が狭いとの見解を持った学生など大学外の世界を知る要望が高まるケースがあった。

表5. G1・G2より生成されたカテゴリー・グループ

カテゴリー	カテゴリー・グループ
大学教育への要望	大学の授業に対する考え
研究への興味	
高い英語能力の必要性	
留学準備の早期の開始	
留学の厳しさ	留学による異なる世界の体験
授業における積極的な態度	
留学による自己の変容	
留学生との共同学習	幅広いつながりの構築
学内での多様な交流の希望	
大学間・大学内でのつながり	
大学外の社会を知る要望	大学外の社会に関する知識
学生と異なる視点	
仕事に関する知識	
世界を知る重要性	世界に関する知識
大学時代の価値	大学生活の意義
学生の甘さ	
人生がもたらす意味	人生と考え方
柔軟な思考	

アルバイトで顧客とのつながりに特別な思いをもつ自分に気づき働く自分に自信が持てた学生，起業体験により経営者の立場から逆の発想で見る視点を持った学生，経営に関する講座を受け人に感銘を与える仕事をしたいと思った学生など，大学外の体験が自分が何をしたいのかのヒントをもたらす例があった。また，気軽に職場体験などを持ち，仕事を現実的に絞れるようになりたいとの要望があった。実際の職業体験によりイメージとの相違を知り希望職種を再考する学生もいた。学生が集える建物を大学内に建築するより学生の意識変革の重要性を述べた学生がいた。

5) 世界に関する知識

留学中に白熱した英語による歴史問題の議論についていけなかった自分に苛立ちを覚え，再留学する強い要望を持つ学生，英語の勉強を開始後，早い段階から将来を考え学内の国内セミナー参加をすべきであったと感じた学生がいた。国際的体験を持つ教員や企業人の世界的視野からの見解に刺激を受け，もっと世界を知りたいと希望するようになった学生がいた。一生懸命な留学生との交友関係により一人の人間として留学生を見るようになった学生がいた。

6) 大学生活の意義

就職活動に捉われず大学時代にしかできないことを精一杯することに価値があると感じるようになった学生がいた。社会人との接触により，またとない学生時代の自由な時間を生かす重要性を認識するようになったケースである。

7) 人生と考え方

いろいろな出会いや出来事を体験するうち各出来事に意味があるとの考えを持っている。多様な人の異なる考えについてその相違を冷静に受け止めることで人が深いところでつながっていけるとの考えに至った学生がいた。

5. 総合考察

本研究は，学部生の意識変容について質的調査を行い，学生が平素教員に語ることの少ない内面について分析したものである。インタビューでは，学生の多くが，自分が何をしたいのか，大学教育と自分の将来や社会との結びつきが分からない現実を吐露した。学生は，大学生活を送る中，学内と学外での広範囲の人々との関係の構築や社会を知る要望を高めていく。広い視野から日本社会や世界と関連づけた大学教育の具体的成果の提示を求めるようになる。

意識変容についてMezirow(1994)が論じたように，多感な大学生活において，勉学，大学内と大学外の対人関係，社会体験，異文化との接触などの多方面から学生は影響を受け，世界観や人生観，大学で学ぶ意義，自分の人生の意味，社会及び世界との関わり方について日々意識を変容させている。天野(2004: 164-166)は，構造化された「知」の獲得が困難となった現在において，大学を学生が達成感を味わえる知的挑戦の場及び人間形成空間として再編成する意義を説いている。学生自身も大学での学問の意

義を問い，大学の学びの空間の生かし方を模索している現状において，幅広い視野から大学の教育空間としての意義を学生に提示すべきであろう。大学外の社会人との接触，留学体験，職場体験，就職活動など自らの実体験が確固たる知識となり将来を見つめ直す契機となっている。学生は，自ら体験した時，価値観が大きく揺さぶられ，自ら行動して知る重要性を認識する。本研究から，大学が学生の人生と世界との関わり方に多面的影響を与えている現状が分かった。学問間や大学外との境界を超えた知的人間形成空間及び多面的な学びの場として，大学が何を提供し得るのかの具体的提示がより重要となろう。

【注】

1) 「グローバル社会におけるパラダイム・シフト：日本の高等教育とキャリアにおける意識変容」と題し，短期交換留学生・日本人学生・社会人を対象とし，高等教育とキャリアにおける高等教育経験者の意識変容について，大学教育と社会を連携させ分析している。インタビューでは，深い内面を語るケースも多く，大学教育経験者の意識研究における深い質的調査の必要性が認識できた。

2) 筆者担当の大学院博士課程前期の学生向け「教育とジェンダーの国際比較論特別講義」及びオムニバス形式の教養教育科目である「ジェンダーと社会」の受講生（学部生1年～4年生）を指す。

3) 例えば，文部科学省のホームページ「平成21年度国際化拠点整備事業（グローバル30）の採択拠点の決定について」を参照。

【引用文献】

[1] 天野郁夫 (2004)『大学改革－秩序の崩壊と再編－』東京大学出版会。

[2] 神谷純子，中川かずこ(2007)「異文化接触による相互の意識変容に関する研究－留学生・日本人学生の協働的活動がもたらす双方向的効果－」『北海学園大学学園論集』第134号, 1-17頁。

[3] 鈴木敦 (2009)「受傷アスリートのリハビリテーション過程におけるソーシャルサポートの影響」（修士論文 ）

[4] 千田有子（2001）「構築主義の系譜学」上野千鶴子編『構築主義とは何か』勁草書房，1-41頁。

[5] 上凱令（1998）「高等教育における学生・教師の意識変化」『高等教育ジャーナル（北大）』第3号, 114-120頁。

[6] 恒松直美（2012）「短期交換留学生の日本留学による意識変容」『留学生教育』第17号, 51-60頁。

[7] 鶴田洋子・小川捷之（1985）「異文化体験による日本人的心性の変容の関する研究－主に対人不安意識をめぐって－」『横浜国立大学教育紀要』第25号，163-186頁。

[8]日潟淳子・谷芳恵・上長然・則定百合子・石本雄真・齊藤誠一・城仁士（2008）「体験活動を通して個人がどのように変容するのかを測る尺度－これまでの関連研究レビュー－」『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』第2巻第1号，143-147頁。

[9] 水野マリ子・リチャード・ハリソン・高梨信乃(2012)「日本語学習支援活動による学生の意識変容について－神戸大学夏期日本語日本文化研修プログラムを中心に－」『神戸大学留学生センター紀要』第18号，1-25頁。

[10] 文部科学省(2013)「平成21年度国際化拠点整備事業（グローバル30）の採択拠点の決定について」(平成25年12月1日) http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/21/07/1280880.htm

[11] 安田淳一郎・近田政博（2009）「教育改善活動に参加する学生の意識変化－名大物理学教室における学生教育委員会の事例－」『名古屋高等教育研究』第9号，113-132頁。

[12] やまだようこ編（2000）『人生を物語ることの意味－ライフストーリーの心理学－』ミネルヴァ書房。

[13] Dalton, J. C. (2001). Career and calling: Finding a place for the spirit in work and community. *New Directions for Student Services*, 95 (Fall), 17-25.

[14] Mezirow, J. (1994). Understanding transformation theory. *Adult Education Quarterly*, 44 (1), 222-232.

【付記】

本研究は「グローバル社会におけるパラダイム・シフト：日本の高等教育とキャリアにおける意識変容」（研究代表者恒松直美・文部科学省科学研究費補助金2009-2011年度　基盤C21530881）の一環として行った。